

ヨーロッパみてある記

—西洋きのご事情—
(その4)

瀧澤 南海雄

鈴木さんからの電話

11月23日(金)

7時に電話が鳴った。「ハロー」と言うと、向こうも「ハロー」と言ったまま様子を伺っている。仕方なく「ジス イズ ミスター タキザワ スピーキング ナウ」と言うと、「アー、瀧澤さんですか。始めまして、鈴木です」と、急に日本語になった。鈴木雄一さんは滋賀県立農業短期大学の助手で、山川さんの友人である。たまたま、ゲッチンゲン大学へ留学し、畜産栄養学を研究中だったので、ドイツ国内のコンタクトを全てお願いしていた。今回のドイツ訪問で、普通なら経験できない多くの事柄に巡り会えたのは、実に鈴木さんのお陰である。

彼の電話の目的は二つで、一つは明日に面談を申し入れていた国立林業林産研究所のパウフ教授から、同研究所は土日が休日であるばかりでなく、明日の金曜日でも半ドンで、しかも教授は午前中に大学での講義を予定しているので、できれば来週の木曜日(29日)に訪問日を変更してほしい旨の手紙を受け取った。そこで、独断ではあったが29日に訪問すると返事を出しておいた、という断わりである。二つ目は、国立土壌微生物研究所(ブラウンシュヴァイク市)のザドラジル博士に電話でアポイントメントの確認を取るように、という連絡であった。

そこで、急ぎスケジュールの調整を山川さんと検討したところ、幸い国立土壌微生物研究所の訪問に2日間を予定していたので、これを1日短縮し、以後の予定を繰り上げて29日に国立林業林

産研究所を訪問することにした。そこで、フロントに電話して、明朝のタクシー予約をキャンセルした。

10時にザドラジル博士に電話する。初めて聞く博士の声は、若々しく元気があり、ドイツなまりの英語を話された。話の中で「宿を予約するので希望を言え」とおっしゃるので2人部屋をお願いしたところ、「分かった。手配するので、21時頃自宅に電話してくれ。そのとき予約した宿の名前を教える」とのご返事であった。

ハンブルグ市街へ

さて、まずは街の探訪だ。10時30分にホテルを出てバスに乗り、ウィルヘルムスブルグ駅から電車に乗り換える。この駅には出札口も改札口もない。壁に貼った運賃表で行き先までの値段を確かめ、自動販売機で乗車券を買って乗り込む。途中検札もなかった。降車駅でも改札口はなく、乗客は切符を持ったままで勝手に駅を出て行ける。完



写真1 ハンブルグ市役所



写真2 斜め切りの材で作った壁かけを売る店

全に乗客を信頼しているのだ。もっとも、不正を働いて、それがばれたときのペナルティー是相当に大きいそうである。

ドイツ語表示しかないので間違え、最初反対方向に向かう電車に乗ってしまう。途中気が付いて乗り換え、市の中心部へ向かった。窓から見える風景で、ハンブルグの市街に入ったと思われるのだが、中心部の駅名も知らないの、適当に賑やかな所で降りると、目の前に大きな教会が現われた。着飾った男女が中に入って行く。我々も入ってみたが、中はホールになっていて、沢山のコート掛けがあり、皆コートを脱いで奥の扉の中に入っていく。何やらセレモニーがあるようだった。(宿に帰って日本交通公社発行の「地球の歩き方」を読むと、そこは市役所で、昔教会であった建物をそのまま使用していることが分かった。)

街を歩くと、クリスマス商戦が始まっていて、広場や道の両脇には屋台の店が沢山並んでいる。日本の祭りとそっくりだ。菓子、おもちゃ、ロウソク、ウッドクラフト、写真、絵、小間物類等々、数々の商品が売られている。特に人だかりが多い店をのぞくと、てんでにグラスを持った人々が、楽しそうに談笑している。グラスからは湯気が立ち上り、中には赤い液体が見える。どうやら爛をした酒らしい。寒くて体が冷えていたところでもあり、早速注文する。3マルクを払って手にしたグラスには、熱めに爛をしたアプリコットワインが満ちていて、口に含むと甘く、たちまち胃の腑から体中にアルコールが駆け巡った。

記念写真ということで山川さんにカメラを向け



写真3 若者たちと



写真4 デパート地下の軽食コーナー

たところ、隣で飲んでいた若いグループの中の女性が、「私がシャッターを押してあげるわ」と声を掛けてきた。喜んでお願いすると「カメラを使えるのか？」と他のメンバーがからかう。「使えるわよ」と答えた彼女は、やんやと睨立てる連中を尻目にシャッターを押してくれた。そこで、返礼にグループ全員と写真を撮ってバイバイ。

スーパーマーケットを探してデパートの地下に潜った。本屋があったので、キノコ図鑑を買う。売り子が感じの良い女の子で、恥じらいを見せながらの朴訥な対応が、昔の日本女性を感じさせ、中年のおじさんには何とも好ましかった。そこで山川さんが料金を払っているところの写真を一枚撮らせてもらう。次に食品売り場へ行くと、惣菜屋があって、多くの市民が買い込んでいる。持ち帰る人、その場で食べる人(そばに立ち食い用の背の高いテーブルが置いてあった)、さまざまである。我々も、ハンバーグらしきものと、ソーセージ、ベークドポテト、ソーセージ入りパンを買って昼食とする(2人分で7マルク)。その後、スー

パーマーケットの中を歩いて売られている商品を観察する。キノコはシャンピニオンだけが並んでいて、シイタケやヒラタケは見掛けなかった。

再び街を歩き、屋台でクリスタルガラス製のバイクを次男の土産に、次いで大きなスポーツ用品店の馬具売り場で、乗馬用のむちを3本買う。さらに学術書専門の本屋を見つけたので、キノコ図鑑を買う。料金を払うついでに、「近くにピアホールが無いか」と店員に聞くと「直ぐそこにある」と教えてくれた。

怪しげなピアホールでの出会い

ピアホールは薄暗く、ロックが鳴り響いていた。期待していたドイツのピアホールの雰囲気と全く異なっている。大きな明るいホールで、アコーディオンに合わせて歌いながらど-ルを楽しむ風景を想像していたのに、これでは唯の薄暗いスタンドバーではないか。中にはあちこちにカウンターがあり、それぞれに担当の女の子がいて、客の注文に応じている。客はまばらで（16時だから当然か）面白くもない。その内、男の3人連れが来て隣に座った。中の一人が盛んに女の子にちょっかいを掛けている。小さなグラスにいれた酒を女の子にも持たせ、互いの腕を交差させて乾杯を重ねるが、女の子がやたらに強く、男のほうが先に酔ってきた。

ところで、丸いカウンターの向かい側に座った女性の動きが、どうもうさん臭い。男性の一人客が来ると横に座って何やら話しかけ、グラスの酒を乾杯しては何処かへ電話を掛けている。聞くと

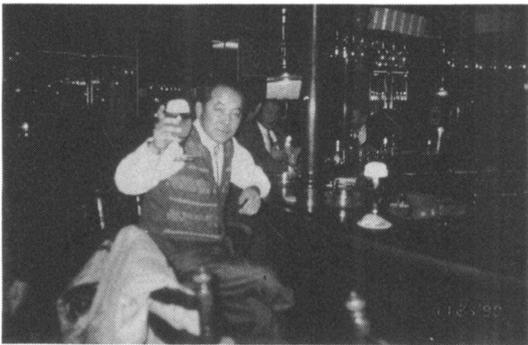


写真5 ピアホールで

もなしに聞こえてくる隣の3人連れと女の子の話から、事情がみえてきた。先程から動き回っている女性は、いわゆるやり手婆（ババアと呼ぶには若すぎるが）で、グループの女性の売り込みを計っていたのだ。さすがは港町、まだ16時だというのに堂々たる商売振りである。

17時にホテルへ帰るためのタクシーの予約を頼んだところ、「まだ早いわよ。おまけに外はどしゃぶりの雨だし、帰宅のラッシュアワーだし、タクシーなんか呼んでも来ないわ。もっと飲んで居なさいよ」と女の子は言う。「いや、時間が掛かってもしいから呼んでくれ」と言うと渋々電話を掛けてくれた。

そのうち隣の3人連れの一人が、「何処からきた？」と話しかけてきた。「日本」と答えると、「ほら見るインタナショナルだ」とカウンターの女の子に向かって叫んだ。「俺たちがイギリス人、ドイツ人、フランス人で、あっちが日本人。な、インタナショナルじゃないか」

「ハーイ、日本人！タクシーを待っているのか？」「そうだ」「俺たち3人も待っているんだ。タクシーが来るまで一緒にやらないか？一杯おごるから」と言うので、一緒に飲むことになった。

聞いてみると、彼らはイギリス、ドイツ、フランスと国籍は違うが食料品のバイヤー仲間、今回は仕事抜きで楽しみに来たのだと言う。さらに、宿泊しているホテルが我々と同じであることも分かった。そのうちタクシーが1台来たので、5人で乗り込んだ。助手席に山川氏、残りが後の席であるから、後部座席はギューギュー詰めである。彼らは相当に出来上がっており、イギリス人は盛んに「日本は凄い、イギリスは落ち目だ」と耳元で叫ぶ。フランス人は、「日本なんて凄くない。何が凄いて言うんだ」と皮肉っぽく聞き返す。イギリス人は、「例えばテレビだ。ソニー、ナショナル、日立に東芝。みんな凄い。それに車だ。ホンダ、三菱、トヨタ、ニッサン。全部凄い。日本は偉大だ。イギリスは駄目だ」とわめき、フランス人は、「日本なんて大したことはない。全部コピーだ。オリジナリティーなんか無い。すべ

て生産工程を改良しただけさ」とやり返す。しょうがないから割り込んで、「テレビに関しては日本もオリジナリティーを持ってるぞ。今から数十年前に、ある日本人がテレビの基本的なメカニズムを発明している。もちろん、おなじ頃、イギリスでも同じようなテレビの研究は行われていたが... 車に関しては、確かに日本人はオリジナリティーを持っていない。品質の向上に成功しただけだ」と私。

ドイツ人はすでに舟を漕いでいる。フランス人もそのうち目をつぶっておとなしくなった。イギリス人は相変わらず日本をほめては、「俺は今晚寿司バーへ行くぞ、それから、もちろん女だ！」と繰り返しわめき散らす。

そんな、こんなで、ホテルへ18時に帰り着いた。ホテルのフロントでイギリス人は「19時30分から俺達は寿司バーへ行く。お前と一緒に飲みたいから時間になったら降りてこないか」と誘うので、「OK」と答えて部屋へ戻る。しかし、風邪の調子は悪化の一途をたどっているため、断りを言うために19時30分にフロントまで行ったが、連中は降りて来なかった。あの様子では、きっと部屋で沈没してしまったのだろう。

真夜中に何処からか女性の声

21時にザドラジル博士に電話するが、呼び出し音がするだけでつながらない。その内、何やら調べものをしていていた山川さんが、「ドイツ国内でのスケジュールが変わったので、ロンドンを訪ねる余裕が出て来ましたよ」と言う。木曜日に国立林業林産研究所を訪ね、その日の夕方ロンドンへ飛び、日曜日の夕方にアムステルダムへ戻ることにすれば、金、土、日と3日間ロンドンを楽しめると言うのだ。ロンドンは私の妹一家が在住しており、時間があれば訪ねてみたいと思っていることを山川さんには話していたので、計算してくれたのだ。（ここで、特記しておきたいのは、山川さんは大変に頼り甲斐のある連れ立ちであった、ということである。この旅行中、列車の発着時刻や乗換え駅の確認をはじめ、全てのスケジュール調

整を一手に引き受けてくれた。そのお陰で、私は未だヨーロッパの時刻表の読み方すら知らないのだ。）

しめた、と喜んでロンドンへ電話を掛け、次にフロントへ行って航空会社の電話番号を尋ねた。ロンドンまでの航空券を明日予約することにする。

部屋に戻ってザドラジル博士に電話を繰り返し掛けるが、一向につながらない。不安になり、鈴木さんに電話して電話番号を電話局で確かめてもらう。間違いのないことだった。21時30分にやっと博士が捕まった。私たちのホテルを探して下さっていたのだという。ホテルの名前と住所、電話番号を教えていただき、25日の朝9時に試験場をお訪ねするとお伝えして電話を切った。

やれやれと、一風呂浴びて出ると、開かずの扉近くの机で手紙を書いていた山川さんが、「瀧澤さん、この部屋はうるさいよ」と言う。何のことも分からずに「あ、そ-」と答えてそのままにし、備え付けの冷蔵庫の酒を飲んでペットに入った。ところが夜中の1時ごろ、何処からかは分からないが、特殊な状況で生じる女性の歓喜の叫びが響いてきて目を覚まされた。一流のホテルでありながら、別室の音が筒抜けになるとはどういう構造になっているのだろうか、と不思議だった。ともかく、そのお祭りはやがてクライマックスを迎えて静かになった。私も眠った。

11月24日

6時30分起床。山川さんに「昨夜は賑やかだったね-」と言うと、「実は昨晚、瀧澤さんが風呂に入っていた時も、あれが聞こえたんですよ」と



写真6 開かずの扉

言う。してみると昨夜は少なくとも2回、お励みになったわけだ。どなたかは知らぬが、ご精の出すことで。しかし、どうして聞こえるのが不思議で、部屋を改めて点検して納得した。開かずの扉にその原因があったのだ。開かずの扉は、4人程度の家族客があった時に、隣り合ったツインルームをつないで、続き部屋にするためのドアだったのだ。だから、隣りのお二人さんと我々は、木のドア1枚を挟んで寝ていたことになる。まして、山川さんは昨夜、私が風呂に入っていた時に、開かずの扉にほとんどくっついた位置で手紙を書いていたのだから、「瀧澤さん、この部屋うるさいよ」と言ったのは無理の無いことであった。

ホテルのロビーの土産物屋

ともあれ、原因がはっきりしたので、7時30分にレストランへ行って朝食をとる。朝食の後、玄関ロビーの土産物売り場で、陶器製のキノコ2点と馬一点を見付けて買った。店主に「他のものと一緒に日本に送れるか」と問うと、「ヤー、ヤー」と言う。部屋に戻って買い集めたキノコ図鑑、土産、余分な下着（毎日洗濯すると3組もあれば十分であることが分かったので、余分をクッション代わりに詰めることにしたのだ）を売店に持っていくと、丁度段ボール箱が一杯になった。「今は紐が無いので夕方までにちゃんとしておく」と店主夫婦が代わる代わるドイツ語で言う。この夫婦は、英語を聞き取ることは出来ても話せないのだ。不思議なもので、こちらドイツ語は不如意だが、相手の言っている意味はなんとなく理解できた。

フロントに行き、「後で荷物を送り出してもらえるか」と聞くと、「今日は土曜日なので12時までに郵便局へ持ち込まないと、月曜日まで送り出せなくなる」と言う。仕方なく、山川さんの洗濯紐を貰って店に届けると、夫婦で手際よく箱を縛ってくれた。

10時30分にタクシーに乗り、「郵便局へ行け」と言うと、「どこの郵便局だ」と運転手が聞く。「こちらは旅行者だから地理が分からない」と言



写真7 郵便局で

うと、「郵便局の次は何処へ行くのか」と聞く。「港を見に行きたい」と言うと、無線で本社と相談した上で、港に一番近い郵便局を選んで連れていってくれた。

郵便局での出来事

郵便局では中年のおじさんが一人で働いていた。この人も、英語はユー、ネーム、アドレス、程度の単語しか話せないが、こちらの喋る英語を理解することはできる。「小包を日本に送りたい」と言うと、書類を2枚くれた。身振りでそれに書き込めと言う。ところが、書類には、ドイツ語とフランス語の記載しかない。英語の記載が無いのだ。

そこで「何処に何を書くのだ」と問うと、一つずつ欄を指差しては、「ユー ネーム」、「ユー アドレス」、「ユー ヤーパン アドレス」と言う。そこで、それぞれに記入して渡したら、別の欄を指差して、「ユー ネーム」と言いながら、手を大きく空中で動かして、大袈裟に字を書くジェスチャーをする。「シグネイチャー(サイン)か?」と聞くと、「ヤー、ヤー」とうなずく。サインすると、また別の欄と箱の両方を指差して、「ネーム」と言う。どうも箱の中身を書けと言っているらしい。「スーペニール(土産)だ」と言うと、最初にペンを取り上げて「スーペニール A」、次に物差しを取り上げて「スーペニール B」、とおじさんは言う。「インディヴィデュアル(個々に)か?」と言うと、「ヤー、ヤー、インディヴィデュアル!」とにっこり。つまり中身の種類を一つずつ書けと言う訳だ。

かなりの時間を費やして、書類はやっと出来上がった。後ろには次のお客さんが並んで待っている。「向こうで待っている」とおじさんはボディランゲージで言うので、指差す方へ移動したのだが、雨戸がはまった窓のようなものがあるだけで、どうして良いか分からない。雨戸のようなものを押してみてもちがあかない。それを見ていた土地の奥さんらしい人が、何か話しかけてくれたのだが、全く理解できない。しかし、郵便局のおじさんがその奥さんに、「その日本人は英語しか分からないから、何を言っても無駄だよ」と言ったことは、ストレートに理解できた。これは、もはや言葉の問題ではなくて、テレパシーの問題であった。

他のお客さんの用事が済むと、おじさんは窓口から一旦消えた。そして、突然雨戸が開いた。雨戸の後ろにはこつ然として大きな秤と、広い作業場が現われたのだ。秤の横にはおじさんが立っていて、「小包を秤に乗せろ」と言う。

目方を量って送料を計算したおじさんは、目を丸くしながら、「153マルク（およそ15,000円）。ユー OK?」と聞いてきた。ドキッ!としたが、ここで慌てては日本男児の名が廃る、とグツとこらえ、「OK」と答える。おじさんは、向こうの窓口で待てと指差して、再び雨戸を閉じた。

そして、元の窓口に現われたおじさんは、私から料金を受け取ると、実に印象的な行動を取った。彼は私の顔を見詰めた後に、両方のかかとを打ち付けながら“気を付け”をし、次いで最敬礼をしながら、「本日は当郵便局をご利用いただきまして、誠に有難うございました」とドイツ語で言ったのである。

小一時間にわたって、ドイツのおじさんと全身全霊で意思を通じ合った日本のおじさんにとって、例えドイツ語を解しなくても、彼の言わんとすることを心で受け止めることは、もはや全く容易なこととなっていた。

(林産試験場 微生物利用科)